

正しい歴史を認識して民間レベルの交流を深める

全日本港湾労働組合 関西地方 大阪支部
小林 勝彦

2015年12月10日～15日まで、国家による屈曲された歴史認識により友好関係に亀裂が入った日中関係を労働者間で交流し、過去の過ちを二度と繰り返さないために「日中不再戦の誓いの旅」と称し、記念館・資料館での学習、慰霊式典で追悼するために日中労働者交流協会の旅に参加しました。

「不再戦の誓いの旅」の日程は、10日、北京にて中国国際交流協会への表敬訪問、11日、中国工運研究所の呂国泉所長を講師に迎えての『中国の労働関係について』の学習・意見交換会、故宮博物院視察、12日、盧溝橋・抗日戦争記念館視察後、南京移動、13日、国家公祭（南京大虐殺犠牲者追悼式典）、追悼キャンドル祭に参列、14日、慰安婦旧所陳列館視察後、蘇州移動、15日、歴史的建造物視察後、上海浦東空港より帰阪。

私は、2年前の2013年11月東アジア青年交流プロジェクトの一員として北京・抗日戦争記念館を初めて視察し凄く感じたのは、日本語で書かれた展示物に「中日両国人民は世々代々仲良くして行こう。中国政府と人民は過去の憎しみにこだわることなく、未来に目を向け中日友好を積極的に促進して行き・・・両国の先輩の指導者と各界の有識者の長期にわたるたゆまぬ努力で1972年に国交正常化が実現した、中国政府と人民は歴史を糧に未来を志向し世々代々友好的に往来するべき・・・」と言う展示ですが、その展示物が一切無くなっていた事を目の当たりにし、この間の安倍政権の中国のみならずアジアに対しての強権的な発言や行動が国家間の不信となり長い年月をかけ積み上げてきた友好が一気に過去へと逆戻りをしたと感じました。

又、初めて訪れた南京では南京大虐殺犠牲者追悼式典が昨年から国家公際になり慰安婦旧慰安所陳列館が今年12月に設立された事も安倍政権への不信の表れであると感じました。友好は謝ることから始まると私は思う。

私は、日本が犯した過ちに対し、人それぞれ感じ方の違いや重さの度合いは違うかもしれないが、悪いことに重い、軽いは無いと思う。我々自身の犯した過ちでは無いかもしれないが、先人たちの築いて来た数多くの功績と共に過ちについても継承者として同じ過ちを繰り返さないためにも真に考え、反省し謝罪して行かなければ、次世代へと受け渡すことは出来ないと感じました。

今、闘える労働組合いや、闘う労働組合は非常に少なくなっています。このままでは、政府や資本の言いなりになり、弱い人は益々人としてではなく物の如く扱われてしまいます。日本では義務教育どころか高校、大学でも正しい歴史を教えない中で、労働組合の役割は非常に需要であると感じています。戦争経験の無い私達が戦争の事を伝えるのは大変な事である事も事実ですが、この時代に合った方法は必ずあるはずで、私達が動き同じ思いの人々と連帯・団結し国際問題・反戦・平和の学習を重ね若い世代に伝えるために確かな取り組みをして行かなければならいと強く感じました。

（この文章は大阪支部機関紙「だんけつ」No293号2015年12月24日号の記事を一部加筆・修正したものです）